

公益財団法人 サントリー芸術財団 音楽事業部

107-6022 東京都港区赤坂 1-12-32 アーク森ビル22階 私書箱509号 Tel: 03-3582-1355 Fax: 03-3582-1350

Nosfa0046 (2021.3.18)

第52回（2020年度）サントリー音楽賞は 三輪 眞弘 氏に決定



公益財団法人サントリー芸術財団（代表理事・堤 剛、鳥井信吾）は、わが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績をあげた個人または団体に贈る「サントリー音楽賞」の第52回（2020年度）受賞者を三輪眞弘（みわ まさひろ）氏に決定しました。

●選考経過

2021年1月11日（月・祝）オンラインによる選考会にて第一次選考を行い、候補者を選定した。引き続き2月25日（木）オンラインにて最終選考会を開催。慎重な審議の結果、第52回（2020年度）サントリー音楽賞受賞者に三輪眞弘氏が選定され、3月16日（火）の理事会において正式に決定された。

●賞金 700万円

●選考委員は下記の6氏

岡田暁生・片山杜秀・白石美雪・長木誠司・船木篤也・松平あかね

（敬称略・50音順）

なお岡田委員は受賞者が係わる公演の関係者であったため、最終選考会の受賞者選定にあたり退室し、5委員で選考を行った。

<贈賞理由>

三輪眞弘の創作は一種のトリガーである。20世紀末から21世紀の今日に至るまで、日本の作曲界において独自の存在感を示してきたのはひとえにその問題喚起力による。だが、三輪の作品は思弁にのみ働きかけるわけではない。聴覚、視覚、ときには嗅覚や触覚までも動員して初めて、その本質が理解可能となるのだ。

2020年はそのような作風を前提として、作曲家自身が企画と構成を行った「ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 ー清められた夜ー」のライブ配信が行われた。コロナ禍で起こった現象への批判的認識に立って、コロナ禍にあってこそ可能な無観客ライブの方法をとりながら、映像監督の前田真二郎、詩人の松井茂らの協力のもと、あらためて三輪の実力が示された公演だったと評価できる。新作「鶏たちのための五芒星」で実際に鶏たちが舞台周辺を歩き回る中、ガムランの演奏が行われ、パイプオルガンとともにJ・オケゲムのレクイエムを人工音声で歌う。「霊界ラヂオ」が死者の声を傍受し、粉が舞う中、ダンスが続き、同時に詩が配信されていく。さまざまな演奏や動作が重なり、接続されていくパフォーマンスは一種の儀式の様相を帯びていた。

人工音声や死者の声の傍受といった仕掛けによって異界と結び、一つの架空の宗教を措定することは、音楽が古来持っていた儀式性を想起させる。コロナ禍に対して、癒しに向かうのではなく、かといって、コロナ以後の新しい日常といった楽観的な立ち位置でもなく、「音楽による音楽のためのお通夜」というシニカルで先鋭的な理念を実体化してみせたことが秀逸である。深夜3時間に及ぶ公演が示した強烈な世界観はこれまでの三輪自身の活動を総括するもので、第52回サントリー音楽賞の贈賞にふさわしい。

(白石美雪委員)

<略 歴>

三輪 眞弘（みわ まさひろ） 作曲家

1958年東京生まれ。1978年に渡独、国立ベルリン芸術大学で作曲をイサン・ユンに、1985年より国立ロベルト・シューマン音楽大学でギュンター・ベッカーに師事する。

1980年代後半からコンピュータを用いた作曲の可能性を探求し、特にアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる手法で数多くの作品を発表。また、様々な分野のアーティストとのコラボレーションに加え、CD制作、著作活動など、その活動は多岐に渡る。

1985年ハムバッハー国際作曲コンクール佳作、1989年第10回入野賞第1位、1991年「今日の音楽・作曲賞」第2位、1992年第14回ルイジ・ルッソロ国際音楽コンクール第1位、1995年村松賞新人賞、2004年オーケストラのための「村松ギヤ・エンジンによるボレロ」で芥川作曲賞、2007年音楽についての独自の的方法論「逆シミュレーション音楽」がプリ・アルスエレクトロニカ、デジタル・ミュージック部門でグランプリ（ゴールデン・ニカ）を受賞。さらに2008年美術家マーチン・リッチズとの共作「Thinking Machine」が同賞ハイブリッド・アート部門で佳作入選。2009年フォルマント兄弟として「フレディーの墓／インターナショナル」が再び同賞デジタル・ミュージック部門で佳作入選。また、映像作家の前田真二郎との共同作品、モノログ・オペラ「新しい時代」（2000年）の再演に対して、2017年に愛知県芸術劇場とあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールが第17回佐治敬三賞を受賞。

作品集CDに「赤ずきんちゃん伴奏器」（1995）、「東の唄」（1998）、「新しい時代信徒歌曲集」（2001）、「言葉の影、またはアレルヤ」（2001）、「村松ギヤ（春の祭典）」（2012）など。著書に「コンピュータ・エイジの音楽理論」（1995）のほか「三輪眞弘音楽藝術 全思考1998-2010」により2010年度第61回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。1996年より岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー〔IAMAS〕、2001年より情報科学芸術大学院大学〔IAMAS〕教授。旧「方法主義」同人。「フォルマント兄弟」の兄。

以 上

(ご参考)

サントリー音楽賞について

公益財団法人サントリー芸術財団では、1969年(昭和44年)の鳥井音楽財団設立以来、わが国における洋楽の振興を目的として、毎年、その前年度においてわが国の洋楽文化の発展にもっとも顕著な功績のあった個人または団体を顕彰し、「サントリー音楽賞」(旧名・鳥井音楽賞)を贈呈しています。賞金は700万円です。

これまでに「サントリー音楽賞」を受賞した方々は下記の通りです。

第1回	1969年度	小林 道夫 (ピアノ・チェンバロ・指揮)
第2回	1970年度	堤 剛 (チェロ)
第3回	1971年度	三谷 礼二 (オペラ演出)
第4回	1972年度	小川 昂 (理論・評論)
第5回	1973年度	ICUオルガン委員会 (国際基督教大学)
第6回	1974年度	秋山 和慶 (指揮)
第7回	1975年度	栗林 義信 (声楽) 山根 銀二 (評論)
第8回	1976年度	芥川 也寸志と新交響楽団
第9回	1977年度	常森 寿子 (声楽)
第10回	1978年度	松村 禎三 (作曲)
第11回	1979年度	吉原 すみれ (打楽器)
第12回	1980年度	妹尾 河童 (舞台美術) 特別賞 江戸 英雄 (第1回日本国際音楽コンクール会長)
第13回	1981年度	柴田 南雄 (作曲)
第14回	1982年度	外山 雄三 (指揮) 特別賞 原 清 (ザ・シンフォニーホール建設グループ代表)
第15回	1983年度	鈴木 敬介 (オペラ演出)
第16回	1984年度	豊田喜代美 (声楽)
第17回	1985年度	日本テレマン協会 (室内管弦楽団・合唱団)
第18回	1986年度	内田 光子 (ピアノ) 若杉 弘 (指揮)
第19回	1987年度	岩城 宏之 (指揮)
第20回	1988年度	林 康子 (声楽)
第21回	1989年度	有田 正広 (古楽演奏)
第22回	1990年度	武満 徹 (作曲)

第23回	1991年度	尾高 忠明 (指揮)
第24回	1992年度	練木 繁夫 (ピアノ)
第25回	1993年度	五嶋みどり (ヴァイオリン)
	特別賞	ウォルフガング・サヴァリッシュ (指揮)
第26回	1994年度	和波 孝禧 (ヴァイオリン)
第27回	1995年度	今井 信子 (ヴィオラ)
第28回	1996年度	園田 高弘 (ピアノ)
		湯浅 譲二 (作曲)
第29回	1997年度	東京交響楽団
第30回	1998年度	林 光 (作曲)
第31回	1999年度	三善 晃 (作曲)
第32回	2000年度	飯守泰次郎 (指揮)
第33回	2001年度	一柳 慧 (作曲)
第34回	2002年度	小澤 征爾 (指揮)
		木村かをり (ピアノ)
第35回	2003年度	野平 一郎 (作曲、ピアノ)
第36回	2004年度	西村 朗 (作曲)
第37回	2005年度	鈴木 秀美 (チェロ・指揮)
第38回	2006年度	東京混声合唱団
第39回	2007年度	細川 俊夫 (作曲)
第40回	2008年度	小山 由美 (声楽)
第41回	2009年度	大野 和士 (指揮)
第42回	2010年度	渡邊 順生 (チェンバロ)
第43回	2011年度	該当者なし
第44回	2012年度	藤村 実穂子 (声楽)
第45回	2013年度	鈴木雅明とバッハ・コレギウム・ジャパン
第46回	2014年度	広上淳一と京都市交響楽団
第47回	2015年度	トッパンホール
第48回	2016年度	小菅 優 (ピアノ)
第49回	2017年度	読売日本交響楽団
第50回	2018年度	高関 健 (指揮)
第51回	2019年度	河村 尚子 (ピアノ)
特別贈賞	1979年6月	巖本真理弦楽四重奏団
”	1997年8月	黛 敏郎 (作曲)

以 上